

The record of the medical welfare and pharmacy facilities inspection training in U.S. Los Angeles

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): the medical welfare and pharmacy facilities inspection training in U.S.Los Angeles, career design 作成者: 山本, 摂子, 菅原, 大嗣 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/226

USA Los Angeles 医療福祉・薬学施設視察研修引率記

The record of the medical welfare and pharmacy
facilities inspection training in U.S. Los Angeles

山本 撰子¹
Setsuko Yamamoto

菅原 大嗣²
Taishi Sugawara

抄 録

本稿は、2015年度のUSA Los Angeles 医療福祉・薬学施設視察研修の引率を通して、視察した施設概要、および講演・交流の概要、視察の実際の視点から感じた内容の報告である。参加者全員がDV被害者支援目的の非営利団体、大学病院、大学キャンパスを、医療福祉研修として障害児教育を行う非営利団体と高齢者居住施設を、薬学研修として医薬品開発受託機関と地域の一般病院を視察した。現地にて薬剤師および看護師として働く日本人の講演、現地学生との交流、学生が準備した折り紙や紙芝居を用いた高齢者との交流も行った。学生たちは、これらの体験から、多人種が生活している社会を実感し、多角的なものの見方、社会の広がり、語学力の重要性を学んでいた。また、社会人基礎力の能力向上の機会ともなっており、引率者はそれらを支援する役割を担う必要性を感じた。

キーワード：USA Los Angeles 医療福祉・薬学施設視察研修引率、キャリアデザイン

Key words : the medical welfare and pharmacy facilities inspection training in U.S. Los Angeles, career design

I. はじめに

私共は、2015年9月7日～13日、USA Los Angeles 医療福祉・薬学施設視察研修の引率を担当した。

本学においては、2010年度から導入された1年次の薬学部以外の学部共通基礎課程「武蔵野BASIS」にキャリアデザイン科目が設置されている。2015年度の到達目標は、「自分の将来をデザインするために、『社会を知る』『理想を培養する（目標を立てる）』『将来の可能性を発見する』」ことであり、「社会を知るために多角的なものの見方、情報収集力を身につける、自分にとっての将来の最適な選択肢を考えられる能力を身につける」である。授業の前半は様々な業界で働く社会人の講義を聞き、考えたことをキャリアデザインノートにまとめる。後半は海外フィールドスタディーズ、国内フィールドスタディーズ、ボランティア体験、キャリア系学会・講演会・シンポ



写真1 サンタモニカの風景

ジウムへの参加のうちいずれかを学生自身が選択、参加、実践して、自分のキャリアに繋げ、人生の歩き方を考えて

1 武蔵野大学看護学部 Musashino University, Faculty of Nursing

2 武蔵野大学 大学事務部 武蔵野学部事務室 Musashino University, University Administrative Division, Musashino Faculty Administrative Office

表1 研修日程

日程	日付	スケジュール
1日目	9月7日(月)	成田国際空港発→ロサンゼルス国際空港着 到着後 サンタモニカ観光
2日目	9月8日(火)	午前 Again Pacific Women's Center 視察 午後 Ronald Reagan UCLA Medical Center 視察
3日目	9月9日(水)	午前 【医療福祉】 Leaps and Bounds 視察 【薬学】 WCCT Global 視察 午後 日本人薬剤師, 日本人看護師による講演 夜 MLB観戦ツアー(希望者対象)
4日目	9月10日(木)	自由行動: ディズニーランドまたはユニバーサルスタジオ
5日目	9月11日(金)	午前 【医療福祉】 Sunrise of La Palma 視察&交流 【薬学】 Whittier Hospital Medical Center 視察 午後 California State University Long Beach 視察&交流
6日目	9月12日(土)	午前 ハリウッド観光 午後 ロサンゼルス国際空港発
7日目	9月13日(日)	成田国際空港着

いく2部構成となっている。USA Los Angeles 医療福祉施設視察研修は、人間科学部、看護学部の1年生にとっては、キャリアデザイン科目の海外フィールドスタディズの一つに該当する。なお、今回の研修はキャリアデザイン科目がない薬学部の主催による「USA Los Angeles 薬学施設視察研修」と同行で行われ、一部の日程は分かれて施設見学を行った。これらの研修の引率を併せて行ったことから、二つの研修を併せてUSA Los Angeles 医療福祉・薬学施設視察研修とする。

本研修においては、参加学生31名全員が女性や子どもを対象とした非営利団体(Non-profit Organization: 以下NPOとする)、大学病院、大学キャンパスを視察した。加えて、人間科学部社会福祉学科9名および人間科学科1名、看護学部看護学科1年生8名は障害児を対象としたNPOと高齢者居住施設を、薬学部薬学科3年生4名と1年生9名は医薬品開発受託機関と地域の一般病院を視察した。また、現地にて医療職として働く日本人薬剤師、看護師の講演、及び現地学生との交流に参加した。市内観光や自由時間も設けられた。視察の日程は、表1に示した。

この研修の引率を通して、視察した施設の概要、および講演・交流の概要、視察研修における学生の学びの視点から引率者として感じたことを報告する。

II. 視察の概要

1. 視察した施設の概要と実際

1) 研修参加者全員が視察した施設

(1) NPO: Asian Pacific Women's Center

① 概要

Asian Pacific Women's Center (以下、APWCとする)は、1995年に、家庭内暴力(Domestic Violence: 以下

DVとする)の犠牲者である女性やその子どもたちに、安全な避難場所の提供とサポートを目的として設立された。設立時はアジア系女性を対象とした初めてのNPOとしてこの名称としたが、現在はアジア系のみを対象とはしていない。

② 視察の実際

修士号を有するアジア系の社会福祉士(Social Worker: 以下SWとする)2名、および結婚・家族セラピスト(Marriage & Family Therapy: 以下、MFTとする)の資格取得を目指し、かつてAPWCにてインターンをしていた日本人留学生からの説明が会議室にて行われた。秘密主義の徹底のため、活動の実際は見学できなかった。

APWCのサービス内容は、DV被害者への避難場所の提供の運営とサポートである。米国におけるDV被害者は、最初にエマージェンシーシェルターに避難、その後、次のステップとしてトランジショナルシェルターに滞在する。APWCはトランジショナルシェルターを、秘密厳守およびアジア地域における多言語・多文化が尊重された環境下で管理運営している。サポートとしては、シェルターの滞業者たちへの、フードスタンプ、携帯電話、バスの定期券の支給、貯蓄やキャリアについてのワークショップ、英語クラスなどのプログラムの提供などである。かつ、労働または通学を奨励し、シェルターを出た後に被害者が自立して生活できるように支援をしている。DV被害者の子どもたちにも、年齢に応じて、学習支援、遠足などの無料プログラムなどの心理的・教育的サポートを提供している。さらに、トランジショナルシェルターに滞在するDV被害者が次に居住するパーマネント住居プログラム用住宅を確保している。DV被害者へのカウンセリング等のエンパワメントプログラムの提供、ロサンゼルス郡内のアジア系コミュニティの住民を対象にしたDV防止な

どの地域教育を展開している。

学生からは、カウンセリング等のエンパワメントプログラム後の被害者の変化について質問があった。SWからは、被害者たちは、文化的背景から自分が受けている行為が暴力だと気づきにくいことも多く、その人自身を変えることはできないが、自分自身で気づいてもらうような関わりをしているとの返答があった。また、日本人留学生からは、日本にはMFTに該当する資格がないために、アメリカで学習しているとの説明があった。社会福祉学科の学生たちにとっては、直接SWの話を聞ける貴重な体験となった。

(2) 大学病院：Ronald Reagan UCLA Medical Center

① 概要

UCLA Medical Centerは、1955年に開設されたカリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部付属のメディカルセンターであるが、1997年のノースリッジ地震で甚大な被害を受けた。そこで、レーガン元大統領、その支持者・友人たちが寄付を集め、UCLAの史上最大の寄付金額1.5億ドルにより立て直しが行われ、Ronald Reagan UCLA Medical Centerへと名称を変更して2008年6月に開院された。同Medical Centerは、西アメリカにおいて最も優秀な医療機関であり、全米の医療機関ランキングを毎年発表している米誌「U.S. News & World Report」によると、2015年の全米病院ランキングで3位に選ばれている。

② 視察の実際

館内に入ると、1階から上階まで、及び1階から地階への吹き抜けの構造、ホテルのような白亜の建物に全員が圧倒された。最初に、地階のホールにて、UCLAに41年勤務しているInternational Nursing CenterのDirectorから説明を受けた。施設の特徴は、ヘリポートを有し、移植治療、トラウマセンター、ロボット手術、サテライト薬局、完全個室タイプの520床を有し、平均在院日数は5日、ICUでは一泊10,000ドルの費用がかかることであった。移植治療としてlatest hundや下半身麻痺患者への移植が行い機能回復がなされ、トラウマセンターは宇宙飛行士や災害を受けた人を対象としていることであった。

その後、看護学部、人間科学部、薬学部の学生たちが、看護師、SW、薬剤師からの説明を受けたのちに、3グループに分かれ、病院内の放射線部門、脳神経系の集中治療室(Intensive Care Unit：以下ICUとする)、心臓血管外科病棟の3か所を案内していただいた。案内には、グループ毎に1名のボランティアにも付き添っていただいた。

放射線部門は、修士号を有する登録看護師(Registered Nurse：以下RNとする)にレントゲン単純撮影室、カ

テーテル検査室などを案内していただいた。とにかく、それぞれの撮影室が広いことに驚いた。RNに感想を求められ「(撮影室の広さが)日本の3倍はある」と筆者が伝えたところ、「うちも引っ越し前(のUSLA Medical Centerの撮影室)はそれくらいの広さだったのよ」と笑顔で返していただいた。操作室や撮影室をつなぐ廊下の幅は日本の2倍はあるが、使用している放射線撮影器具や医療器具に日本の病院と使用している器具との大きな違いはなく、撮影画像にも日本との差はみられなかった。

脳神経系ICUは、UCLAに225名いるナースプラクティショナー(Nurse Practitioner：以下NPとする)のうちの1名に案内していただいた。病室や廊下は放射線部門と同様に日本よりも広いが、病室内の設備は、ベッド足元の天井に患者が視聴できるTVモニターが設置されている以外は、日本の大学病院、総合病院と同様であった。

印象に残ったのは、「ドクターロボ」である。NPの説明によると、これはベッドサイドでの補助者のサポートを必要とするものの、遠く離れた場所にいる医師が、遠隔操作により診断、診療行為を行える機能をもつことのであった。写真のように、人型であり、普段はICUの廊下にある充電ステーションで待機をしている(写真2)。また、このロボは、病院のロックアウトがあった場合の活躍も期待されているとの説明があった。

心臓血管外科病棟では、修士号を有するRNに案内して



写真2 ドクターロボ

いただいた。病室は全て個室であり、室内には、ベッド、心電図モニター、ナースコール、家族が宿泊できるようなソファベッド、バスやトイレが設置されており、ICUと同様に日本の個室病室との大きな違いはみられなかった(写真3)。病棟看護師の勤務は12時間の2交代制勤務であり、勤務帯ごとに心電図モニター監視業務に専念するナースを1名配置しているとの説明があった。「(監視のみの業務は)退屈しないのか?」と尋ねたところ、「私は好きですよ」とRNから返答があった。薬剤管理はサテライ



写真3 病室（心臓血管外科病棟）



写真4 ビリヤード場

ト薬局にて行われ、薬品庫は全て指紋認証を用いた施設がなされていた。看護師が実際に看護実践している場面の見学はできなかったが、物品の保管庫に、患者が咳嗽する際に抱きかかえるクマのぬいぐるみが準備されているとの説明から、看護の心を感じることができた。

3か所の部門見学後に、International Nursing Center Director への質問の時間が設けられた。学生から「全米の最優秀医師として275人の医師が選ばれているそうだが、そのような優秀な医師が集まる理由は？」と質問があり、「Good Nurse, Good Care, Good Outcomeに医師が魅力を感じて集まる」との返答があった。最後に、学生たちに「情熱をもって好きなことを実践してほしい」との熱いメッセージをいただいた。学生たちは、メッセージを受け止め、勉学や趣味などを「情熱をもって」実践していこうとの意思をもった様子であった。

(3) 大学キャンパス：California State University Long Beach

① 概要

1949年に設立された大学で、23校のキャンパスを有するカリフォルニア州立大学の中で人気が高く、Best Value Public Schoolや Safest Campus に選ばれている。2013年秋学期の受験者数は8万人を超え、35,000人を超える学生が学び、280専門分野が選べ、100を超えるクラブ組織がある。

② 視察の実際

大学構内の見学では、日本人留学生を含む在學生に東京ドーム28倍の広大なキャンパスの一部である、フードコート、ビリヤード場（写真4）やボウリング場があるプレイゾーン、有名な青いピラミッド型の体育館を案内いただいた。全米には東海岸、ラスベガス、そしてロングビーチ校の3か所にピラミッドがあるそうだ。敷地内の通路には要所に非常ボタンが設置されており、まさにアメリカの

大学である広大さを実感した。

2) 研修参加者が分かれて見学した施設

(1) NPO：Pediatric Therapy Network's Leaps and Bounds —看護学部、人間科学部学生が視察

① 概要

Pediatric Therapy Network は、1996年に自閉症やダウン症などの子どもの親たちとセラピストによって設立されたNPOである。障害をもった子どもたちが自立して日常生活を送る基盤づくりをミッションとして、家庭的な雰囲気の中で、質の高いセラピーや様々な教育プログラムを提供している。

② 視察の実際

施設は一戸建ての建物2か所、および広い庭であった。施設責任者から施設の概要に関する説明を受けた。Leaps and Bounds は Pediatric Therapy Network が運営する18か月から3歳までの幼児治療プログラムであり、early intervention である。健常児と障害児を区別しないインクルーシブ教育を基に、ひとりひとりの発達や能力に応じて、理学療法士（Physical Therapist：以下、PTとする）、作業療法士（Occupational Therapist：以下、OTとする）、言語聴覚士（Speech Therapist：以下、STとする）が個別的教育を提供、障害児が健常児から学ぶ環境も取り入れられている。保育スタイルには、感覚統合療法、作業療法、運動療法、言語療法が織り込まれている。州施設、親が連携をとり運営しているこの施設の利用者は140人ほどの子どもたちであり、自閉症とダウン症候群が半々、身体的な障害がある子どもたちも利用している。その後、広々とした施設内、および実際に子どもたちにプログラムが提供されている場面を見学させていただいた。プログラムは、専用の部屋にて子ども1名に対しPT、OT、STそれぞれ1名が提供しており、親や有資格者であるボランティアも参加していた。Circle timeになると、子ど

もたち、職員たち、ボランティアたちなどプログラムに参加している全員が一か所に集合し、歌や手遊びを楽しんでいた。また、経済的に恵まれない子どもたちへの遊び場としても提供されており、元気いっぱい駆け回る子どもと学生たちが言葉を交わす場面もみられた。

学生からは、グループと個別支援のメリットについての質問があった。個別支援は特別なニーズに応じられることがメリットであるとのこと、また、グループ支援は生きていく上で必要な社会性や共有、順番などを学べるメリットがあるとの説明があった。学生たちは、プログラムの実際の見学、利用者が使用する遊具の体験を楽しんでいた（写真5）。



写真5 遊具

(2) 高齢者居住施設：Sunrise of La Palma ―看護学部、人間科学部学生が視察

① 概要

Sunrise は、1981年に家庭的で快適なシニア居住者中心の施設をというビジョンからバージニア州北部に特別養護老人施設として開設された。1987年にビクトリア朝様式の高級アシステッドリビングの第一号を開設、現在はアメリカ、イギリス、カナダの3か国で300以上のサンライズコミュニティを展開している。カリフォルニア州には41のサンライズコミュニティがある。特徴は、個別支援、24時間体制、専門家チームによる看護、自立支援である。

② 視察・交流の実際

訪問するなり、日系居住者からの「こんにちは」の挨拶と犬の歓迎を受け、入口正面には吹き抜けとなった構造、2階までの階段、ビクトリア朝の優雅な建物に圧倒された。施設責任者に建物内を案内して頂いたが、気品のある内装、室内の落ち着いた雰囲気、無機質な日本の福祉施設とは異なる環境に驚いた。居住者は個室に居住しており、それぞれのドアの前には居住者を紹介したフォトグラフが掲示されている。建物の内部は、家具も含めてビクトリア

調の調度品が用いられ、食堂のテーブル上は布ナフキンが優雅にお皿の上で折りたたまれており、ホテルやレストランのようにゆったりとしたくつろげる空間になっていた。午前10時に優雅に食事をしている居住者の方々もいらした。糖尿病など食事療法が必要な居住者もいるが、個室には冷蔵庫が備えられ、共有スペースにも果物やスナックを常備しており、「食べてはいけない」などと制限をしてはいないとのことであった。食堂からはテラスへの出入口があり、季節の木々に彩られた庭の散策や散歩を楽しめる構造となっていた。認知能力に難のある居住者たちは、温室様のサロン、育児、仕事などの記憶を想起できるような体験ができるコーナーが設けられたセキュリティ優先構造の専用室に居住していた。それらの居住者たちは、サロンに車椅子、リクライニング車椅子を使用し集まり、歌を楽しんでいた。車椅子を足で自走できる居住者は、私たちの集団に笑顔で近づき、挨拶を交わしてくださいました。

居住者たちと学生たちの交流会は、施設内の見学終了後食堂にて行われた。交流の内容は、折り紙体験と紙芝居披露であった。まず、食堂に集合した10数名の居住者の方々に、準備してきた英文記載の折り紙のしおりを用いて、学生1名が居住者1名に対して折り紙の折り方を説明した。学生たちは英語でのコミュニケーションや折り方をみせてのアイコンタクトを試みながら、一緒に手を動かすことを通して、気持ちが通じ思いが共有できることを体験できた様子であった。学生たちの中には、紙芝居の時間になってもなかなか居住者のそばを離れられず名残惜しそうに涙ぐむ者もいた。なんとか気持ちを切り替え、次の紙芝居を英語で披露した。学生たちは、紙芝居を選び、グループ毎に英訳を行い、渡米後に現地ガイドに英訳を確認していただき、配役を決め、視察研修終了後に連日数時間を練習するなどの準備をしてきた。学生が緊張した表情で1枚目を提示すると、日系の居住者から「ももたろう！」と読んでいただけ、学生たちも肩の力が抜けのびのびと読み聞かせをしていた。特に鬼が島での戦いの場面は迫真の読み聞かせとなり、居住者の方々から盛大な拍手をいただくことができた。

視察は2時間弱であったが、見学と説明、交流と充実した時間を過ごすことができた。館内に掲示された月間予定表に本学の視察も記載されており、歓迎されていることを実感できる視察であった。

(3) 医薬品開発受託機関：WCCT Global ―薬学部学生が見学

① 概要

1998年に設立された医薬品開発受託機関（Contract Research Organization：以下、CROとする）である。医

薬品の開発プロセスにおいて、製薬会社より臨床試験（治験）を受託している。

② 視察の実際

同社で勤務されている看護師・薬剤師の日本人社員の紹介を受けた後、アメリカにおける治験の状況、同社の行ってきた治験の概要について説明を受けた。主にフェイズ1（健康成人に対する治験薬の投与）や、アメリカの薬を日本等の他国で販売する前の人種ごとの治験の実績が多いという説明であった。人種間の効能や副作用の差異は十数年前ほど問題視されていないということだったが、とりわけ日本での販売をする場合は医薬品医療機器総合機構のチェックが厳しいとのことだった。

説明を受けた後は、同社内の見学をさせていただいた。受付・健康診断エリアの他、治験協力者の入院の様子、採血や健診の様子なども見学することができた。日本ではCROと治験施設支援機関（Site Management Organization：以下、SMOとする）は別となっていることが多いが、同社ではSMOも兼ねているため、看護師や薬剤師も勤務しているとのことだった（写真6）。

参加した薬学部1年生は治験に対する知識が乏しかったため、基本的なことから説明いただく場面が多かったが、実際に治験協力者の様子を見ることができたため、イメージとして捉え易かったように思えた。



写真6 薬局

(4) 地域の一般病院：Whittier Hospital Medical Center — 薬学部学生が見学

① 概要

1957年に創立されたAHMCヘルスケア・グループの短期病院として、中黒人系・メキシコ系住民の治療とケアを行っている。医師500人、40診療科、178床を有する病院である。

② 視察の実際

実際に勤務されている薬剤師のうち、薬剤部 Director からアメリカ薬剤業界について、勤めていらっしゃる日本

人薬剤師から、病院内の案内を受けた。アメリカの病院・保険制度について簡単なレクチャーを受けた後、実際に病院内を見学させていただいた。

研修2日目に訪問したRonald Reagan UCLA Medical Centerとは病院規模が異なり、近隣住民のための地域病院であった。

実際に薬剤部にも立ち入らせて頂き、薬剤部の調剤の仕方を実際に見ることができた。また、今後のアメリカにおける薬剤師のあり方の展望も説明いただき、学生にとって、大変刺激的な見学となっていた。

2. 講演・交流の概要

1) アメリカで働く日本人薬剤師による講演

講師は、5歳から米国に在住し、現地の他学部での大学卒業後、薬学を学び薬剤師となった日本人薬剤師であった。米国で薬剤師となるには一般の大学卒業後に薬学部に入學する、手術室専門薬剤師の存在、コードブルーの際には薬剤師も現場に直行して、救急処置場面での薬剤を準備して医師と共に治療にあたるなどの説明が印象に残った。

2) アメリカで働く日本人看護師による講演

講師は、日本の医療系大学を卒業後に米国の大学にてRNを取得し、Ronald Reagan UCLA Medical Centerにて就労している日本人看護師であった。米国のチーム医療は、日本と同様に他職種が担っているが、日本にはない職種として、マッチョマンで構成され体位変換等を専門に行う‘Lift team’、せん妄や自殺未遂患者に付き添う‘シッター’、スピリチュアルなどの職種が紹介された。また、緩和ケア、End of Life Careについても、日米の様々な違いを用いて説明がなされていた。

3) 現地学生、日本人留学生との交流

California State University Long Beachにおいて、8名の現地学生および日本人留学生との交流が行われた。参加した全員が、英語の自己紹介の後、グループに分かれての交流を楽しんだ。本学ブランドマーク入りのクッキーや飴を食べながら、交流を深めていた。

4) 講演・学生との交流の実際

1)と2)の講演は予定時間を超過したため、学生からの質問時間がとれず残念であった。医療に特化した講演の内容は、薬学部、看護学部の学生たちにとっては多くの学びがあり、医療専門職としての直近の将来のイメージを明確にするものであった。

3)の交流は、最初は積極的な学生と消極的な学生に分かれ、緊張した表情もみられていた。引率者は最初と最後

のみ参加したが、終盤には学生たち全員が明るく楽しい生き生きとした表情に変化していることに驚いた。日本人留学生も参加していたことから、日本語でのコミュニケーションもとれたこと、交流が進むにつれて、英語でのコミュニケーションへと発展できたことが窺えた。学生たちは、自分が相手を受け入れ、知ろうとする姿勢で接すれば相手も自分を受け入れてくれると実感していた。

Ⅲ. 引率者として感じたこと

研修1日目に、現地ガイドから「Los Angeles は人種のサラダボウルと言われている」との説明があった。これは、研修中、数名の現地ガイドたちが口々に繰り返し語るフレーズであった。現地ガイドや視察への日本人留学生の参加など予想していたよりも日本人がいる状況に加え、Los Angeles 地域の視察施設、娯楽施設、ショッピングモールなどにおいて、多くの人種の方々が居住している地域であることを目の当たりにした。また視察施設の利用者は、白人、黒人、アジア人、南米など様々な人種の方たちであった。娯楽施設や宿泊したホテルも同様に多様な人々が利用していた。ホテル近くのスーパーには、アメリカならではのビッグサイズの食品に加えて、アジア系、南米系、日本食など様々な食品が並んでいた。ホテル周辺のレストラン、ショッピングモールや空港のフードコートには、ファミリーレストラン、ファストフード、コーヒーショップなどに加え、中華料理、メキシコ料理、タイ料理、ラーメン等の日本食、その他の多様な食事があった。移動中のバスの車中からは、ダウンタウンの路上に座り込む多数の路上生活者を見た。研修中は、文字通り、“人種のサラダボウル”であることをどの場所においても目にする研修であり、そのような環境下での視察と体験は、まさに‘多角的なものの見方’の必要性を実感できる学びであると感じた。

参加した大学1年生たちは、3月まで家族と住居する地域社会や通学する学校等の限定された範囲から、4月の大学入学、キャリアデザイン科目での社会人の先輩の講義、アルバイトなどの経験を通して、自分の社会を確実に広げている。そして9月には、日本からロサンゼルスへ飛び出し、本研修に参加することでさらに広い社会を実感し、サラダボウル内の様々な食材のような多様性の知見を得て考える機会をもつことができた。まさに「社会を知る」「多角的なものの見方」について実感し、考える機会となったのである。また、学生たちは、視察体験から学ぶものが多いことを感じると同時に、英語力の重要性をも痛感、つまり‘情報収集能力’に語学力が含まれることを実感していた。またキャリアデザイン科目の一環ではなく視察研修と

して参加した薬学部学生たちも、同様に社会を広げ、多角的にみて、語学の必要性を実感していた。薬学部の1年生のみならず、薬学部3年生が大学生活をあと3年過ごすことを考慮すると、それらの実感から、薬剤師としての将来のデザインを考える機会を得たと感じた。

講演や学生との交流からは、数年後の自分たちの将来像であるキャリア早期や中期の可能性について、具体的なイメージを掴むことができた様子が窺えた。医療（看護）福祉・薬学の学生たちは、‘自分にとっての将来の最適な選択肢’として医療福祉の国家資格取得を目的とした本学に入学している。さらに「最適な選択肢」を考え、自らのキャリアの理想、自分の目標を立てるためには、今回の視察研修で得た、「多様な人々と多角的なものの見方」「社会の広がり」「語学力の重要性」などについての気づきや学びが大いに活用できると考えられる。

また、参加学生の殆どが1年生であったことから、社会人基礎力の向上に関連する能力取得も可能であると思われる。社会人基礎力とは、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」（経済産業省、2006）と定義されている。大学1年生たちにとっては、本研修への参加は、人間性、基本的な生活習慣の育成としての意味が大きいと感じた。他学科の学生と一緒に宿泊して、グループでの集団行動を行うためには、（互いへの）思いやり、公共心、時間厳守などの基礎的なマナー、身の回りのことをしっかりやることが求められる。それらが基盤となり、初等・中等教育において学んだ基礎学力、大学で学ぶ専門知識、それらが相互に関連しながら、基礎学力・専門知識を活かす力として社会人基礎力が身につくのである（図1）。また、学生たちは皆、視察見学の際に積極的に質問をしていた。視察時間が目いっぱいとなり、質問時間のないプログラムに対しては残念との声も聴かれた。そのような積極性は、海外フィールドで学ぶという行動とともに、社会人基礎力の能力要素の一つの前に踏み出す力でもある。海外フィールドワークはそれらの能力の習

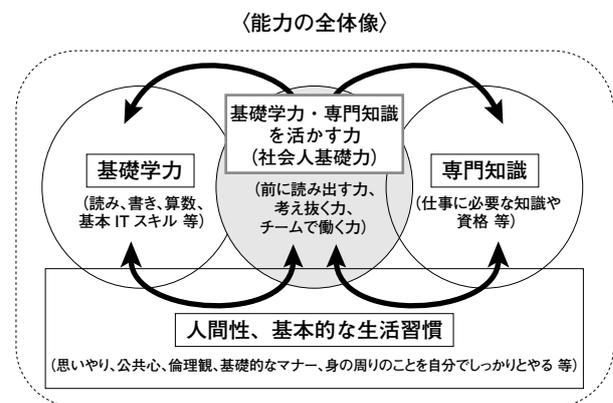


図1 「社会人基礎力」能力の全体像

得にも役立つと感じた。

引率者は、上記の能力を学生が習得できるような支援を実践した。具体的には、参加学生が班行動をとれるよう、班ごとに、点呼、高齢者施設での交流の準備、翌日の予習と質問の準備、研修終了後の視察内容のまとめや振り返りを行うよう宿泊先にて指導した。その結果、徐々にではあるが、学生たちは班行動がとれるようになり、社会人基礎力の一部を習得できていたと考えられる。また、事前に質問を準備することが、質問をするという前に踏み出す力の発揮にもつながった。本研修の引率においては、大学1年生の学生が参加者であることを考慮して、社会人基礎力の習得がなされるような支援の役割を担っていることを認識することが必要であった。

IV. おわりに

研修の引率を通して、視察した施設の概要、および講演・交流の概要、視察研修からの学びから引率として感じたことを報告した。

学生たちは、出発時（写真7）と帰国時に就職・キャリア開発部長の洞口教授に見守っていただいた。帰国直後、12時間のフライトによる疲れも見せずに「また行きたいです。」と笑顔で口々に語った学生たちの表情は生き生きとしていた。その姿は、学生たちが、アメリカという社会を見て、感じて、気づき、つかみ取り、自分で考え、自分の所属する社会が世界とつながっている広がりを感じ、自分のキャリアへの目標を考えていることを表現しているようであった。直接学生が社会の広がりを感じていることを目の当たりにした引率者として、学生が社会を広げ、知っていく過程にあり、社会人としての基盤を作っていることを認識して、今後の教育活動に活かしていきたい。



写真7 出発時 洞口教授と成田空港にて撮影

引用文献、サイト

- 武蔵野大学ホームページ. (2015). キャリアデザイン. Retrieved 20/9/2015, from : http://www.musashino-u.ac.jp/career_international/career_education.html
- 総務省. (2006). 社会人基礎力 Retrieved 4/11/2015, from : <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/aboutNouryoku-nozentaizou.pdf>